資　料

# (翻訳) ジョージ・ギッシング「時計台の明かり」

八　幡　雅　彦

Masahiko YAHATA, Japanese Translation of
George Gissing's "The Light on the Tower"

フリートウッド夫人は1時間から2時間腰を降ろして暗い物思いにふけっていた。が，ついには1月の夕方の寒さを覚え，暖炉に火をつけるために立ち上がった。やがて炎は，それまでは深まりゆく夕闇のためにぼんやりとしか見えなかった彼女の身の回りの物をちらちらと照らし出した。その部屋は夫の書斎だった。壁には政治家，政界関係者の肖像画が掛けられてあり，書き物机の上には政府発行報告書，評論誌，そして山と積まれた新聞紙が置かれてあった。

さらに数分の沈黙の後，彼女は，まるで嫌々ながらのように，暖炉のそばの椅子から身を起こし，ランプを灯した。そして窓辺に行った。彼女はブラインドを降ろしながら，日光の淡い残照のためにまだ姿を変えつつあるまだら模様の北の空を，建物の屋根屋根を見渡すのだった。はるか遠く，この都会の地平線上に広がる薄暗闇に視線を据えると，真っすぐ目の前には，明々と，星のような光がゆらめくことなく照り輝いていた。それはウェストミンスターの時計台の明かりだった。

疲れて嫌気のさした表情と仕草でフリートウッド夫人は机の上のいくつかの定期刊行物をぱらぱらとめくり始めた。すると，ドアをノックする音が遮り，女中が顔をのぞかせた。

「奥様，バッジ様がお越しです。御主人様はいつ頃お帰りなのか教えていただきたいとのことですが。」

「今夜は遅くなると伝えてちょうだい。」明らかに腹立たしさのために，きっとして答えるのだった。しかしそれは意地悪というには程遠い口調だった。彼女の顔は，深い悩みをたたえていたけれども，その表情には長い間保ち続けてきた気品があり，うるさい審美眼にも十分かなう顔立ちだった。着こなしも上手で，シンプルな趣味の女性だった。15分も立たないうちに再び女中が姿を現した。

「奥様，ウィリス様です。御主人様がいらっしゃらないので，奥様にお目にかかりたいとのことですが。」

フリートウッド夫人は，明らかに断る寸前だったが，ふと心の中で自分自身と論争を交わしたようであった。その論争は訪問者を中に入れようという結論に達し，まもなくしてつかつかと階段を昇る足音が聞こえた。30に満たない男が入って来た。随分とみすぼらしい服装だったが，手袋をはめ，絹の帽子をかぶっていた。勢いよく進み出て来て，息つく間もなく即座に口を開くのだった。

「奥さん，ニュース聞きましたか。メリマンの奴，死んだんですぜ，猟場で事故にあってね。夕刊に出てますよ。旦那は選挙に出なくちゃなりませんぜ。もちろん，旦那，そのつもりなんでしょ。」

「さあ，私には何とも言えませんわ。」彼女は急に神経質になって，話しにくそうに話すのだった。「わ，私は主人にその覚悟ができているとは思いませんですし……」

「ああ，そんなこと聞いたら旦那の友だちゃみんながっかりしますぜ。奥さん，もちろんあんたが旦那を説得してくださるんでしょ。メリマンの奴，評判を落としてましたからねえ。急進党の候補にとっちゃあ，またとないチャンスですぜ。旦那は立候補するだけで，きっとそれ以外何をする必要もありませんぜ。旦那，いつ戻られます。今，どこにいます。旦那さえよろしけりゃ，すぐにでも私がウォーターベリーに飛んで行きますぜ。」夫人は頬杖をついて座っていた。わずかに顔を赤らめ，考え込んでいた。口を開かないうちに家の中から声が響いてきて，それと同時に彼女は立ち上がった。

「主人が帰って参りましたわ。」

階段から大きな話し声と笑い声がしてきた。書斎のドアがぱっと開き，フリートウッドが，友人に従われ，不意に姿を現した。40近い年齢で，彼の妻より何歳も年上と見受けられた。その表情には，妻の表情同様，生活の乱れが刻印されてあった。乱痴気騒ぎで目はぎらぎらと輝き，頬はほてっていた。高い資質を備えた人間の顔ではなかった。誰が見ても指導力ある人間だとは思えなかった。しかし情熱を伝える力だけは間違いなく備えており，この時それはフルに発揮されているようであった。

「よお，ウィリスじゃないか！じゃあおまえはニュースを持って俺たちよりもひと足先に来たってわけだ。女房の耳にはすでに入れたってことだな。ギンブル，おまえを俺の女房に紹介させてくれよ。メアリー，おまえ，ギンブルの奥さんの名前は良く知ってるだろ。ウィリス，うちにいろよ，そして俺たちといっしょにメシを食おうぜ。俺たちゃ，この件については良く話し合う必要がある。後で別にもう何人かやって来るからな。」

ギンブル氏の容姿は魅力的なものではなかった。白髪交じり，鷲鼻で，首が太く，ひざはたるんでいた。フリートウッド夫人は彼の太った手の圧力にひるんだ。予期せぬ客たちの食事の準備をしなければならないという必要性が生じたために，彼女はそそくさとその部屋を辞した。彼女が出て行くや，３人の男たちは騒々しく，大声で話し始めた。普通ではない話振りから，フリートウッドの興奮は強い酒によって助長されたことがうかがえるようであった。他の２人は十分しらふだったが，明らかに彼らのあるじの上機嫌を保つことに全力を尽くしていた。臨時雇いの新聞記者であるウィリスはウォーターベリーの町出身で，あたかも選挙期間中は彼の役割が不可欠であるかのような口の聞き方をするのだった。ギンブルという男は，得体の知れぬ職業で，政治上の扇動術に精通しているようであった。そのうえに，メリマン氏の死によって空席となったばかりの選挙区に関しては特別良く知っていると公言してはばからなかった。

「いいか，俺は約束できないからな！」フリートウッドは大声でわめき続けた。「決着をつけておかなくちゃならんことがいくつかあるんだ。とにかく俺ははっきりと然るべきところから誘いを受けなくちゃいかん。俺は何も約束しないからな！」

彼には国会議員の経験があった。しかし，それは1886年の短期国会の，わずか半年の間であった。彼がウォーターベリーの有権者たちの前に再び姿を現した時には，押し寄せる保守主義の波によってあっという間に人目のつかぬところに流されてしまった。そして再度92年の総選挙に立候補し，再度ひどい敗北を喫したのだった。それからわずか１年後の現在，彼には決意を遅らせるもっともな理由があった。実際，彼のふたりの友人たちもひょっとしたらその理由でと思っていた。ふたりはその思いが事実でないことを願っていたけれども。フリートウッドはほとんど資力が底を尽いていた。彼は選挙戦費用をどうやって工面してよいのやら分からなかった。ましてや選挙が終わったらどうやって食ってゆけばよいのやら分からなかった。

フリートウッドは商売で富を築いた男の長男として十分な蓄えを持って人生を始められた。にぎやかなことが好きなうえに，溢れんばかりの人のよさを備え，さらには目立って才気煥発で，彼は無数の友人たちに取り囲まれていた。そして，程度の差こそあれ，害悪を与える腰ぎんちゃくたちの数は少なくはなかった。名目

上，彼は法律を勉強したが，30になっても彼の職業はいまだになまけた，浪費癖の生活の恥ずべき覆いにしか過ぎなかった。厳しいけん責をかうことがたびたびあったとはいえ，父親とは1885年，彼自身が政治に参加するようになるまでは友好関係を保っていた。老フリートウッド氏は民主主義者とは決して関わりを持とうとしなかった。しかし，若い息子は父親の当面の関心をいっさい無視し，庶民側に味方して急進的立場を取り，そして翌年，ウォーターベリーから国会議員に選出されたのである。もうひとつ彼のしたことは父親との絶縁を決定的なものにした。フリートウッド氏が満足していたことには，明らかにロバートは，遺産相続人であり，輝くばかりに美しいハレー嬢という特定の女性の魅力に心打たれていた。十中八九，ふたりは結婚するものと思われた。ところがここで再び政治が邪魔をした。ロバートはハレー嬢に背を向けただけではなかった。ウォーターベリーの成功にすっかり酔って，彼は社会的地位も持参金もまったくない別の若い女性にプロポーズし，結婚したのである。このできごと以来，父親は二度と彼の前に顔を見せなかった。1年後に亡くなったフリートウッド氏は長男には雀の涙程度の遺産しか残さなかった。彼の富の大部分は，分別に富んだ友好的紳士である次男のトーマスの手に渡ったのである。しかも，喪の期間が終わるか終わらないかのうちに，トーマス・フリートウッドはハレー嬢と結婚したのだった。この成り行きに，ロバートはひどいどんちゃん騒ぎをしながら笑いころげた。

幅広い範囲の彼の友人たち，支持者たち，腰ぎんちゃくたちは国会でフリートウッドは何か大きなことをやってくれるものと期待していた。彼がなにひとつできなかったのは，彼が関わった政権はかくも短期間で終わる残酷な運命にあったということによって説明されるかもしれない。議会で彼は口を開く余裕さえなかった。しかし，この議員生活の体験はフリートウッドの性格と将来に悲惨な影響を及ぼすには十分の長さだった。彼は，その激しやすい性質のために怒りが次から次へと積み重なり，その半年間の緊張にさえも耐え切れないということが証明された。次の選挙では彼は大苦戦を強いられ，完全な敗北に終わり，健康を損ねてしまった。その症状はとても危険なものだったので，彼の若い妻は精神錯乱に陥るどころだった。ふたりは外国へ行った。そこでフリートウッドは再び健康を取り戻したようであった。しかし父親の死後彼が置かれた境遇は，彼自身が認める以上に彼にショックを与えたことは明白だった。それまで孤独には耐え切れなかった彼が，今や自分の陥った不幸について1日中ひとりで考え込みながら過ごすということが多くなった。それから激しい反動が訪れた。自分の家や他の場所で人を集めてどんちゃん騒ぎをし，彼は「将来性ある男」を演じ続けたのである。純粋なお世辞に，あるいは私利私欲に満ちたお世辞に酔いしれ，ありとあらゆる浪費に身を委ね，どうしたら食っていけるのかという偽らざる問題に直面することになる日に，まるでわざとであるかのように駆け足で急いだのである。

彼と妻の間には深い愛情が存在していた。ありとあらゆる試練に打ち勝ってきたことがその証しのように思われた。メアリー・フリートウッドは夫を愛していただけではなく，まれな力の持ち主として尊敬し，長い間彼の偉大な将来性に対して不動の確信を持ち続けていた。彼女のような境遇にある女性にとっては当然の不安にわずかでも注意を払おうとしたのは，夫の敗北宣告がいやおうなしに押し付けられた時が初めてだった。限りなく陽気な夫を見慣れていたので，彼女は最初のうち，彼が酒によって身を持ち崩すという男性にありがちな人生行路に足を踏み込んだとはつゆ思わなかった。その事実が議論の余地ないものとなった時，彼女は夫の救済に全身全霊を傾けた。フリートウッドは，たびたび身の危険には十分気づいたけれども，ただ妻が助けてくれることを望むに過ぎなかった。ふたりは人目につかぬ所での隠遁を試みたが，終生の習慣はいかんともしがたかった。男は，称賛の声なくしては生きていかれず，すぐに人間社会へと舞い戻って行くのだった。そして，この同じことの繰り返しは男を明らかに破

滅へと一歩一歩導いて行った。

メアリー自身は夫に1892年の選挙で再びウォーターベリーから立候補することを強く勧めた。彼女はこの時すでに夫が普通の職業に身を打ち込むことを望んでも無駄だと分かっていた。しかし彼は何か職に就かなければならなかった。さもなければ身を滅ぼしてしまうからである。そして，彼女はいまだに国会議員が夫の天職であると信じて疑わなかった。彼女は，婦人傍聴席に腰をおろし，夫の声が意気揚々と雄弁に響き渡るのを聞くことをいまだに夢見ていた。フリートウッドはよく他人と言い争った。敗北によって再び無名の地位に陥落した時，彼はそれまで隠していた悲惨な事実を妻に打ち明けた。つまり，一時ふたりは資産に頼って生活していたのだが，愚かな投機が不幸な結果をもたらしたために，今や唯一の問題は，どうやって食ってゆくかということになっていたのである。

彼らはハムステッドの快適な家を手放し，状況を眺めるために海沿いにある借家に引っ越した。ここで，ある日の朝，妻が驚いたことに，フリートウッドは彼女がかつて見たこともない激しい怒りを爆発させたのである。彼は妻に一通の手紙を見せた。

「トムの奴からだ。俺は弟に援助を依頼する手紙を書いたんだ。当然のことだろう。あいつ今でこそ金持ちだが，それもある程度は俺のおかげだろ。あいつの返事を読んでみろよ！」

兄は弟の結婚以来ほとんど連絡を取っていなかったが，トーマス・フリートウッドの書き方には十分に親愛の情が込められていた。しかしロバートの求めにはどうしても応じられないと断言してあった。お兄さんはこの数年間どうして何ひとつ仕事をしなかったのですか，どうして何の得にもならない仲間たちとひどく乱れた生活を送ってきたのですか，いや，いや，お兄さんどうぞ男らしく振る舞って自らを苦境から救ってください，と。

「どういうことだか分かるか。」フリートウッドはどなった。「あいつの女房のせいなんだ。あの女は俺に恨みを持ってて，おまえのことも嫌ってるんだ。おまえにも話しただろう，それがあの女の性格なんだ。いいか，俺は一度あいつの家に寄ったんだがな，あんな女に会うなんて，俺は自分をばかにしたいような気持ちだったぜ！トムの奴，あの女には頭が上がらないんだ。あいつはあの女の許可がないと何ひとつやる度胸がないんだ。馬鹿野郎めが！あの女はおまえが堕落するのを見たがってるんだ，落ちれば落ちるほどいいのさ。そうさ，俺に必要だったのはまさにこういうことだったんだ。ああ，働いてやるとも！メアリー，おまえはまだまだ俺を信じてもいいからな。」

メアリーの目は輝いた。彼女には希望が蘇った。そして数日間は，夫の方で何か大きなステップを踏み出してくれるものと期待しながら，控えめに沈黙を保っていた。次に彼女が夫から聞いたのは，彼の弟が500ポンドを送って来たということであった。

「いいか，あいつ，このことは内緒でしなくちゃならなかったんだぜ。もちろん，あいつの女房，俺のもう一通の手紙も見ただろう。この返事の中で，トムの奴，これ以上はもう一銭もよこさないからって書いてやがる。ああ，この分はもらっておくとも。だってこの金がないと俺はどうしたらいいか分からないからな。これを俺は何かの足掛かりにするつもりさ。」

そしてふたりはロンドン南部のこの小さな家を買い，フリートウッドは何か仕事を見つけたようであった。不幸なことにも彼のまわりには同志が集まった。当然の如く，彼の仲間たちはもはや彼が栄えていた頃の仲間たちとは違っていた。彼はありとあらゆる方法で，ありとあらゆる場所で知り合いを作った。ウィリスやギンブルのような男たちがそうで，メアリーの目から見れば好ましい友人というにはほど遠かった。しかし，夫は仲間なしではやっていけないということが彼女には分かっていた。ほどほどの酒の機会，そして支持者の励ましなしに夫が生きて行くことを考えるのは無駄だった。夫は自分が重要人物だと，将来性ある人物だと思わないと気がすまなかった。そして月日がたつにつれ再び悪い習慣へとはまり込んでしまった。

希望に輝いていた頃に比べると，最近では，夫の酩酊状態をかつてのあり余る情熱と見分けることはずっと容易になっていた。メアリーは時折，彼がうつぶして屈辱のあまり泣きわめくのを目にするようになった。

この発作の後，フリートウッドは声を失って鬱状態に陥ることがあった。そのような時，彼は，暗がりの中，書斎の窓際に腰をおろして，はるかかなたウェストミンスターの時計台の明かりをじっと見つめているのだった。昔彼が言ったことから，メアリーは，このようにして夫は野心を蘇らせようとしているのだ，魂を邪悪な怠惰の泥沼からはい上がらせようとしているのだということを感じ取った。だから彼女は孤独な物思いに沈む夫をそのままにしておいた。悲しいかな，彼女は，たとえ夫が自分に対して変わらぬ愛を抱いているとはいえ，自分の力では夫を救えないのだということを悟った。

努力しようという健全な衝動もなしに，国会議員という栄誉に対する思い入れは彼の内では片時も離れぬ思い，病的なまでの執着心となっていった。時として，それは精神異常者の幻覚と区別し難いことさえあった。疑いようもなく1886年に関する彼の記憶はでたらめになっていた。彼が決してやってもいないことを，確かに一度もしてはいない第一線の政治家たちとの会話を，まるで当たり前の記憶であるかのように話すのだった。ただ，彼の希望がどんなに打ち砕かれているとはいえ，政治以外の点においては彼の知性は十分しっかりしていた。もちろんのこと，彼は節約をほとんど心掛けずに暮らした。夫を誉めそやす友人たちはなんらかの方法でその献身の報いを受けているとメアリーは思ったが，それは間違いではなかった。フリートウッドはどれだけ暮らし向きが苦しいかを決して知られまいとした。そして今や彼の取り巻きたちは，食事とか，レストランでの夕食とか，金がなくなればわずかの金とかをせびるためにくっついてくるような連中だった。彼が再びウォーターベリーあるいは他の選挙区から選出されて国会議員になるチャンスがあるとは恐らく誰ひとりとして思っていなかっただろう。しかし彼の腰ぎんちゃくたちのうち幾人かは，この2，3週間の選挙運動から得られる楽しみや利益を期待していたのである。この日の晩，夕食後，6人の仲間たちがフリートウッドの書斎に集まっていた。メアリーは，希望と不安の交錯に震えおののきながら，夫の声が，時折，彼よりも威厳のない声を圧して雷のように轟くのを耳にした。もちろん，一同はしこたま酒が入っていた。やっと解散した時，彼らのうちひとりが階段でひどくころんだ。メアリーは，夫ではないかと恐怖に駆られ飛び出して行ったが，違うことを確認するや，このどんちゃん騒ぎの場から急いで退いた。

静まりかえった時，フリートウッドの声が優しく呼びかけた。妻はすぐに書斎にいる夫のところに行ったが，空気は耐え難いものだったので，彼女が最初にしたのは窓を開けることだった。フリートウッドは背後から彼女に近づいた。

「ごらん！」過度の緊張のために，彼は低いしゃがれ声で言った。「明かりが輝いてるだろう！　国会なんだ，国会なんだよ。」

その瞬間，輝きは消えた。

「消えた！　本当に消えたのか。それとも俺の目が……」

「本当に消えたわ。」夜の寒気に打たれて震えながらメアリーは言った。「あなた，隙間風に当たらないようにしてちょうだい。もうすぐしたら部屋の空気は良くなるわ。」「メアリー！」彼は妻の肩をつかみ，いつもにない目つきで彼女をじっと見つめた。

「メアリー，どうしたら俺は国会議員になれるだろうか。」

彼女が驚いたことには，夫はその夜の酒盛りでは酔い潰れていなかった。恐らくは，彼の現在のゆゆしき立場が彼に酒を控えさせるのに一役買っていたのだろう。

「でも，あなた，選挙に出る費用さえ十分じゃないでしょう。」

「そうだなあ。ああ，十分じゃないとも。それに終わった後……」

「でも，じゃあどうして私たちに選挙なんてことが考えられるの。」メアリーは悲痛な面持

ちで尋ねた。

「どうして考えられないんだ。」フリートウッドはやけくそになった男のように叫んだ。「これが俺の最後で，そして唯一の望みなんだ。国会議員になれたら，俺の将来は開けてくる。もしそのチャンスを拒否されたら，俺にはもうどんなチャンスも巡って来ないだろう。きっとどんなチャンスもな！」

彼がこれほどまではっきりと将来を見据えて，これほどまで異常に運命を強調して語るのは初めてのことだった。とにかく成功か破滅かという恐ろしい二者択一に関して，夫の語っていることはまぎれもない真実だとメアリーは強く確信した。そのうえ，今でも彼女は国会が夫を救ってくれるかもしれないと自分を思い込ませることができた。

「どんな計画を持っているの。」彼女は尋ねた。

男は目を落としてじっとたたずんでいた。その態度は，計画を立てるには立てたのだが，何かの理由で容易には説明できないという様子だった。

「じゃあ,弟さんに頼ることは望めないのね。」メアリーは続けた。

「分からない。それは問題だな。窓を閉めようか。もう部屋の空気は良くなっただろう。実はな，俺がしたことでまだおまえには黙っていたことがあるんだが，それを話すよ。2，3か月前にな，総選挙がそう遠くないことを知って俺はトムに手紙を書いて，俺が再び国会議員になるための援助をしてはくれないだろうかと依頼したんだ。俺は弟にありのままの真実を告げたんだ，国会議員になることが俺の人生の唯一の目的であり希望なんだとな。すると，弟の奴，もうこれ以上何も期待しないでくれと返事してきたばかりか，俺のもくろみはすべて気違い沙汰の考えだという書き方だったんだ。なぜなんだ。おまえ，そう思うか。どうかおまえの本心を聞かせてくれないか。」

彼は赤くほてった目で彼女をじっと見つめた。それはそれは哀れみがこもった真剣な眼差しだったので，メアリーは，たとえ心ではどんなふうに思っていても，夫を落胆させるようなことを言う勇気は毛頭起こらなかったであろう。しかし，遠慮したことを言う必要はまったくなかった。夫を信じる気持ちは，それが必要になるにつれてますます強くなるのだった。彼女は，夫が，わずかの差であったけれどもウォーターベリーから当選したあの偉大な年，大衆の前で行った演説のことを思い出していた。ああ，あの時の幸福といったら！　下劣な党派間論争の中で夫はどれほど輝いていたことか！夫の熱弁のうちには真の情熱の響きが，高潔な寛容の響きが込められていたわ，それからいろんなことがあったけれども，夫は根は純粋で，つまらぬ利己主義とは無関係で，しらふの状態の時は常に立派な大志を抱いてきたということを私は今でも知ってるわ……

「弟さんはあなたを助けるべきよ。」彼女は大きな声で言った。「それが弟さんのまぎれもない義務だわ。」

「ああ，メアリー，弟は助けてくれるよ，あいつの女房さえいなければな。」

話しながら，フリートウッドはじっと意味ありげに妻を見つめようとした。しかし彼は妻と目を合わせることができず，目を落とした。

「俺はあの女のことが分かってるんだ。」彼は続けた。「俺はあの女が何を望んでいるか知ってるんだ。あの女が望んでいるのは，いつか俺がやって来て施しを，あの女に施しを請うということなんだ。それがあの女の意地悪な性分を満足させることになるのさ。」

「そんなことありえないわ。」

「ありえないって，おまえ，俺にそんなことができないって意味か。俺はいつだってできると思ってるぜ。そうするのが俺の義務だと俺は半分信じてるのさ。それも俺ひとりのためじゃなくてだぞ。メアリー，俺は自分のことと同じようにおまえのことも考えなくちゃならないんだぞ。」

夫の考えは妻を激怒させ，妻は激しい反抗の叫び声を上げた。そのような行為は男としてあるまじきことだわ，それに現状からしてそんなこと絶対考えられないわ，と。

「あなた，弟さんの奥さんのことをそんなふうに思うなんてとんでもない誤解かもしれないわよ。」妻は強い口調で言った。「どういう根拠があって。」

夫は頑固に，猛烈に意地を押し通すのだった。弟は援助を拒否することはないさ，トムは寛大でいい奴なんだがかわいそうなほど気が弱いんだ，俺は弟のことをいろいろ聞いたんだがどれもこれもがあの傲慢な女の尻に敷かれていることばかりなんだ，あの女に援助を依頼することによってな……

「もう聞きたくないわ。」メアリーは遮った。その顔は真っ赤で，目は怒りに燃えていた。「これ以上話すのはよしましょうよ。ロバート，そんなこと言ったら自分をおとしめるだけよ。」

夫は妻から目をそむけた。彼は首をうなだれ，その表情はひどく意気消沈していた。この論争の的になっていることについては，ふたりはそれ以上ひとことも語らなかった。数分してフリートウッドは寝室に行った。メアリーは消えゆく暖炉のそばでさらに30分腰をおろしていた。

短く，眠れない夜の後，彼女は朝8時に目を覚ました。夫は熟睡していた。もう1，2時間は微動だにしないかもしれなかった。メアリーは起き上がり，できる限り音を立てないで着替えた。普段着ではなく外出着を身にまとった。それから下に降りてコーヒーを1杯飲んだ後，急いで2，3行の文章を書き，封筒に入れて宛て名をロバートにした。夫が降りて来たら，召使がすぐにこの手紙を夫に渡してくれるだろうと期待して。そして彼女は家を出た。

9時から10時の間にフリートウッドは妻の伝言を受け取った。それには次のように書かれてあった。

今夜戻って来ると思います。でも確かではありません。どうか心配しないでください。私たちの助けになりそうなことを私は思いついたのです。今夜ではなくても，明日には必ず戻って来ます。

フリートウッドは驚き，困惑した。メアリーの決意についてできる憶測はただひとつしかない，しかし妻がそんなことやるはずない，そんなこと考えただけでもぞっとする，考えるのはよそう……。しかしながら，午前中，幾度も幾度もその考えは彼の心に蘇ってくるのだった。前夜の不節制で当然のごとく気分が悪く，新聞社でウィリスと会う約束の時間に思い至るまで，彼は書斎で座るか横になるかしていた。午後になるにつれて彼の心は何か活力らしきものを取り戻して来た。理にかなった希望がある用向き以外でメアリーがこんなに突然出かけて行くはずがない，恐らくきっと妻は自分の淫らな考えなどよりもはるかに実際的なことを思いついたに違いない，妻はいざ時に当たっては臨機応変の才をフルに発揮できる口数の少ない女性のうちのひとりだから。すでに彼は妻に対する感謝の気持ちで熱くなっていた。とにかく，自分としては妻の努力に報いることができる方法はただひとつ，今日は一滴も酒を飲まないようにしよう，メアリーは，戻って来たら，自分が平静でしらふなのを見て彼女にふさわしい夫であると思ってくれるだろう，メアリーは自分にはずいぶん辛抱してくれた，恐らくは辛抱し過ぎたくらいだ，寛大過ぎたくらいだ。彼は決して妻の忠誠ぶりを忘れたことはなかった。他ならぬ妻のためにも結婚当初の約束を果たさねばならないと常に自分に言い聞かせてきた。そしてもし実際，自分が現在のこの機会を利用してその約束を果たすのを妻が手助けしてくれるのだとしたら……。しかし一時たりとも無駄にはできなかった。たぶん，まさに今日自分はウォーターベリーに行かなくてはならないだろう，しかしウィリスがその選挙区の幾人かの連中と電報で連絡を取ると約束してくれていた，間違いなく今日の午後知らせがあるだろう。

彼がその新聞記者に会ったのは2時近くだった。

「見てくださいよ，これを！」ウィリスは電報をはためかせながら大声で言った。「ウォーターベリーのボーウィックがですね，もちろんジョン・ボーウィックの奴のことは知ってるで

しょう，あなたはすぐ来なくちゃいかんと電報を打ってきてますぜ。『ゼッコウノチャンスセンキョタイサクホンブケッセイチュウ』とありますぜ。私，話してなかったですかねえ。あなたはいつ出かけられます。」

「明日までは無理だな。でも有権者に演説をする準備はできるだろう。もう昼食は済ませただろ。」

ウィリス氏は，フリートウッドとは何事も昼食時近くに約束することにしており，会う前に食事代を費やすのは馬鹿馬鹿しい思っているふしがあった。ふたりはレストランに入って，心の底からリフレッシュした。フリートウッドは，彼のした決意を決して忘れることなく，ブルゴーニュ・ワインのボトルから害悪を受けることはなかった。それは新聞記者がほとんど飲み干したのだった。ここで宴が終わっていたら何ひとつ問題はなかった。しかし，当然のごとく，ウィリスは彼の友人をすぐ近くの，話し好きな紳士たちがよく出入りする社交場へ連れて行ったのである。そこでの政治談義には酒は必要不可欠な供であった。フリートウッドは知らぬうちに酔いが回ってきて，自分の現状がどういうものかも忘れて，まるでウォーターベリーの補欠選挙には間違いなく出馬するかのような話振りをするのだった。今再び「売り出し中の人物」とみなされ，そのように呼ばれる喜びに抗することは彼にとって不可能だった。彼の熱弁はいつもの印象を人々に与えた。彼を知らない連中も自分たちの会話を中断し，彼の話に聞き耳を立て，「あれは誰だ。」と問うのだった。いつもよりさらに立て続けに飲んでいることに自分では気づかず，フリートウッドは揚げ句の果ては周囲の笑いをかってしまい，この時点でウィリスは彼を外へ連れ出した。

「街で夕めしを食えないんだ。」偉大な男は説明した。「重要な電報が家に来ることになっているんだ。俺と一緒に来いよ。きっといい知らせだぞ。」

ふたりはタクシーに乗り込み，フリートウッドの家には7時半頃着いた。メアリーは戻っていなかったが，電報が届いていた。差出人はメアリーだった。

「スグウォーターベリーニイクコト」とそれは書いていた。「スベテテハイズミ　アスハヤクカエル」

フリートウッドは今や彼の偉大な目的以外は眼中になくなり，歓喜の叫びを上げた。ウィリスはそれを手に取り，「万歳！」と声を上げた。

「ほーれ！」フリートウッドは叫んだ。「これが俺の妻のやってくれることさ。男には申し分ない女だぜ。あれに匹敵する女はイギリスにはいないぜ。ウィリス，あれはおしゃべり女のうちには入らないがな，本物だぜ。心底信頼できる。あいつのような妻を持ってる男は滅多にないぞ。」

2階の書斎で彼は再び電報を吟味した。それは彼がほとんど名前を聞いたこともない土地から打たれており，彼は当惑した。新聞記者がいるにもかかわらず，彼はひとり言をつぶやくのだった。「女房の奴，こんな所で何してるんだ。じゃあ，結局，俺が思っていたことは間違いなわけだ。一体全体どうやってあいつやりおおせたんだ。まあ気にすまい，どうせすぐ分かることだ。女房が戻って来るまではウォーターベリーには行けないぞ，ウィリス。小さいながらも勇気ある女だ！もちろん，女房もいっしょに連れて行くからな。」

彼らの食事が整えられた。ふたりは食べ，飲み，近くに住む知人を求めて再び勢いよく出かけた。真夜中をいくらかまわった頃，フリートウッドは家にたどり着いた。彼はやっとの思いで階段を上ることができ，自分の寝室を見つけ，後ろ手にドアを閉めた。

彼はそのままごろんとベッドに身を投げたが，2，3分寝返りを打った後，酔いがまわった彼の魂は，いっしょに書斎に持って上がってきたあの驚異の電報をもう一度読みたいと欲した。彼は手探りで，よろめく足でガスにたどり着き，なんとかかんとか火をつけた。と，まさにその時，彼はまだマッチを見つけていないということを思い出したのである。ポケットにマ

ッチ箱があったが，空だった。彼は鏡台を手探りし，いくつかのものをたたき落とした。そして探しても無駄だと諦めた。それからすぐに彼はベッドに戻り，仰向けになっていびきをかき始めた。

最大限に点灯したガスの火は真っ暗な部屋に流れ出し，何時間も燃え続けた。

メアリー・フリートウッドは田舎町の宿屋で眠っていた。その町から彼女はロンドンへ電報を打っていたのである。夫が言い出した屈辱的な試みを自分で実行に移そうと決意した彼女は，約50マイル離れた，トーマス・フリートウッドが日常生活を営んでいる土地へとその日の朝汽車で向かっていた。彼女がその家に着いて分かったことといえば，フリートウッド夫妻は同じ州の，行くのに1時間かかる所に住む友人を訪ねているということだった。自分の務めはどんな犠牲を払ってでも果たさねばならないと決意した彼女は，教えられた住所に向かい，そこでついにトーマス・フリートウッド夫人との面会を許されたのである。彼女が会おうと心に決めていたのはまさにその婦人であり，トーマスではなかった。その会見を通してメアリーは，弟の行為に対するロバートの解釈には一点の間違いもないと信ずるに至った。トーマス・フリートウッド夫人は彼女の以前のライバルがへりくだる姿にあえて喜びを隠そうとせず，磨きのかかった女の恨みが与えうるありとあらゆる苦悶と癒されることない苦痛を最大限にまで与え，ついにはメアリーの願いを寛大に喜んで聞き入れるのだった。主人は私の言いなりになりますからと，そして，意味深な笑みを浮かべながら，野心家のロバート義兄さんには十二分な援助をお約束できると思いますわ，と……。その後でトーマスが部屋に呼ばれた。彼は，不安げに，明らかに恥じ入りながら，妻の表情をうかがって命令を読み取ろうとした。そして彼女のした約束を承諾するのだった。

残念なことに，メアリーはロンドン行きの最終列車にわずかのところで乗り遅れた。しかし満足したことには電報が打てたのである。そして大きな喜びのために彼女はひとりぼっちの夜を寝ないままで明かした。

結局，ロバート・フリートウッドの姿を再びウォーターベリーで見ることはなかった。しかし，彼の名前はその人生の略歴とともに地元の新聞に掲載された。「彼は偉大な人物になるあらゆる素質を備えていた。」── 自由党紙はそう書いていた。

（使用テキスト　George Gissing, "The Light on the Tower", *A Victim of Circumstances and Other Stories*, London : Constable & Co. Ltd., 1927）